

活動報告**「多文化研究セミナー」活動報告**

藤岡阿由未・池 沙弥

平成30年度「多文化研究セミナー」では、最新の研究と学生への教育を直接結びつけ、年間計4回のセミナーを行った。まずは、年度初めに学生に募集をかけて「多文化研究セミナー運営チーム」を結成し、事前勉強会や準備については「運営チーム」の学生が中心になって行うことにより、学生が能動的にセミナーに取り組むことのできる環境を整えることから始めた。そして文化、言語研究をリードする講演者（使用言語：英語または日本語）を招聘することにより、本学での文化、言語の学びを基礎にしなが学生自身が各テーマについての文献を読み、議論を重ね、当日の討論者を務めるという学生主導の運営形態を導入することになった。

第1回目（7月14日、担当：池）は、熊本学園大学外国語学部の Judy Yoneoka 教授を講師に迎え、講演会を開催。言語景観（交通標識や看板など、言語が用いられている公共空間の景色）について研究している Yoneoka 教授が、日本のトイレを例に、言語景観の多言語化について英語で講演を行った。参加した学生は、普段気にすることのなかった日本のトイレで見られる言語景観に着目することで、異文化理解の重要性や言語で表現することの難しさについて考えるきっかけとなった。



第2回目（10月18日、担当：藤岡）となるセミナーでは、「沖縄文学×外部視点」（担当：藤岡阿由未教授）と題しアメリカ人映画監督レジ・ライフ（エマーソン大学特任教授）を迎え、「カクテル・パーティー」（2016年製作）を上映し、ライフ氏による講演を行った。沖縄文学の金字塔「カクテル・パーティー」（大城立裕著、芥川賞受賞作）は約半世紀前に書かれた小説で沖縄の米軍基地の問題を扱っているが、その変わらぬ問題の今日性が浮き彫りとなり、アメリカ人の視点で映画化した作品は、原作に異なる視点を提供しており、参加者にとって多様な視点を学ぶ機会となった。



第3回目となるセミナー（11月22日、担当：藤岡）では、「International Relations as Comic: Marjane Satrapi's Trilogy」と題し、国際関係論が専門のマリー・トーステン（元同志社大学教授・ICU特別研究員）が、グラフィックノベル『ペルセポリス』における政治とメディアの接点について講演を行った。イラン出身のマルジャン・サトラピによる自伝的グラフィックノベル『ペルセポリス』は、10代のイランの少女の目を通してイスラム革命、イラン・イラク戦争を経た激動の時代を描いており、世界各国で翻訳され、また映画化された作品である。イスラム教とゾロアスター教の軋轢、権力者の圧制がもたらした悲劇が都市空間ペルセポリスに浮かび上がるこの作品を通して、グラフィックノベルというメディアで何がどのように伝えられているのかをトーステン氏は説明した。受講した学生からは、イスラム圏の政治、宗教やメディアの在り方などについての質問があり、活発な議論が行われた。



第4回目（1月25日、担当：池）では広島大学から English as a medium of instruction (EMI) 教育に関わっている柴田美紀教授を迎え、「Japanese L2 English learners' positions in miscommunication: Who is responsible for failures?」と題した講演を行う。外国人留学生と密接にかかわる EMI のコースにいる日本人学生がどのように英語使用と学習に向き合うのかを現場の視点を交えながら考えていく。執筆時点では開催前となっているが、新たに2年生も運営チームに加わり、積極的な準備がなされているところである。

異なる文化的背景を持つ人々と連携して取り組むべき様々な問題は今日きわめて複雑化し多様化してきている。グローバル化への対応において、多様な文化に触れ、学びを深め、いかに能動的に実践に移していくかということが現在の課題の一つと考えられる。本年度の「多文化研究セミナー」では、様々な授業の学びを基礎にし、セミナー運営・企画を通して実践力を養うという本学部の理念を実体化させるアプローチを取り入れることにした。それによって、我々が直面しつつある問題の複雑化、多様化への対抗手段の基礎を文化と言語の観点から構築し、発信するというプロセスを学生は体験することができたのではないだろうか。また企画段階から運営チームとして活動することにより、「発信」していくために必要な知識、計画、多角的な視点の必要性を体験する機会となったと考えられる。